

『背負われる救い主』 (マタイの福音書 1章 18-25 節) 2022.12.25.

<はじめに> クリスマスはメルヘン、ファンタジーではなく、現実生活の中に起こった出来事です。救い主イエスがこの世に来られ、それを迎えた人たちに目を留めます。救い主を迎えるなら、すべて願い通りうまく行く、とクリスマスの物語は語っているのでしょうか。

I 生まれ来る救い主

① その名はイエス

御使いが両親に生まれ来る子の名前を伝えました。イエスは「主は救い」の意で、民をその罪から救うために(21)世に来られた神の御子です。クリスマスは人として生まれてくださった神の御子なる救い主を喜び迎え、祝う時です。

② 罪を背負うために(イザヤ 53:6,10)

人にとっては喜びの出来事ですが、御使いイエス側から見ると、手放して喜べないいばらの道です(ピリピ 2:6-8)。しかし、神の御子が人として生まれることによって、自ら十字架の上で私たちの罪をその身に負う(I ペテ 2:24)ためには必須要件でした(ヘブ 2:17)。

II 救い主を迎える両親

① 救い主を守るマリア(18、ルカ 1:30-37)

救い主なる男の子を胎に宿すと、御使いがマリアに告げます。そのとおりの懐妊したことで、ヨセフとの婚約関係は危ぶまれ、彼女に疑いの眼差しが向けられます。それでも彼女は救い主を宿す栄誉とともに、汚名とその後の苦境をも担う覚悟で受け入れます。

② マリアを守るヨセフ(19-25)

ヨセフはマリアから聖霊による懐妊を告げられても、真に受けられません。彼は内密に婚約破棄することで汚名を自分が負ってでもマリアと胎児を守ろうとします。が、御使いの御告げで思い止まり、懐妊したマリアを迎えます。二人とも罪を背負おうとしたのです。

III インマヌエルの事実

① 私たちのために

「神は、罪人たちの言うことをお聞きにはなりません」(ヨハネ 9:31)が、その罪人を救うために神は救い主を送られました。神がともにおられる証しであり、資格ない者に注がれる神の恵み・あわれみです。だから、すべての人がクリスマスを喜び祝う意味があります。

② 神の御思いを知る

マリア・ヨセフは神のみこころに従い、生まれ来る子を受け入れたが故に苦しみ・葛藤を抱えています。それは御子をこの世に遣わす父なる神、また世に来られる御子キリストの思いにも通じます。それに目が開かれるとき、神がより親しく感じられます。

<おわりに> 神がともにおられることさえ、自分中心にとらえやすい私たちがいます。私たちは神と同じ思いを抱くことを通しても神を実感できます。マタイ 11:28-30 のイエスの語り掛けを心に留めましょう。(H.M.)